

始



特255

672

久留米藩勤王思想傳統

冊255
672

學問の學風

先生の學風

學問といふものにはまた種々あり、記誦の學
は制度に明に、或は性理に精しく只一偏に凝
りけずなどいふ様の學もあり。就中性理の學
と、やいもすれば禪法師の口氣に似て其論高
の也：：凡て學問は己を修め人を治むるもの
出てくれば、よく論孟など講じて、聖賢

高山の大人なに人ぞ人ならば

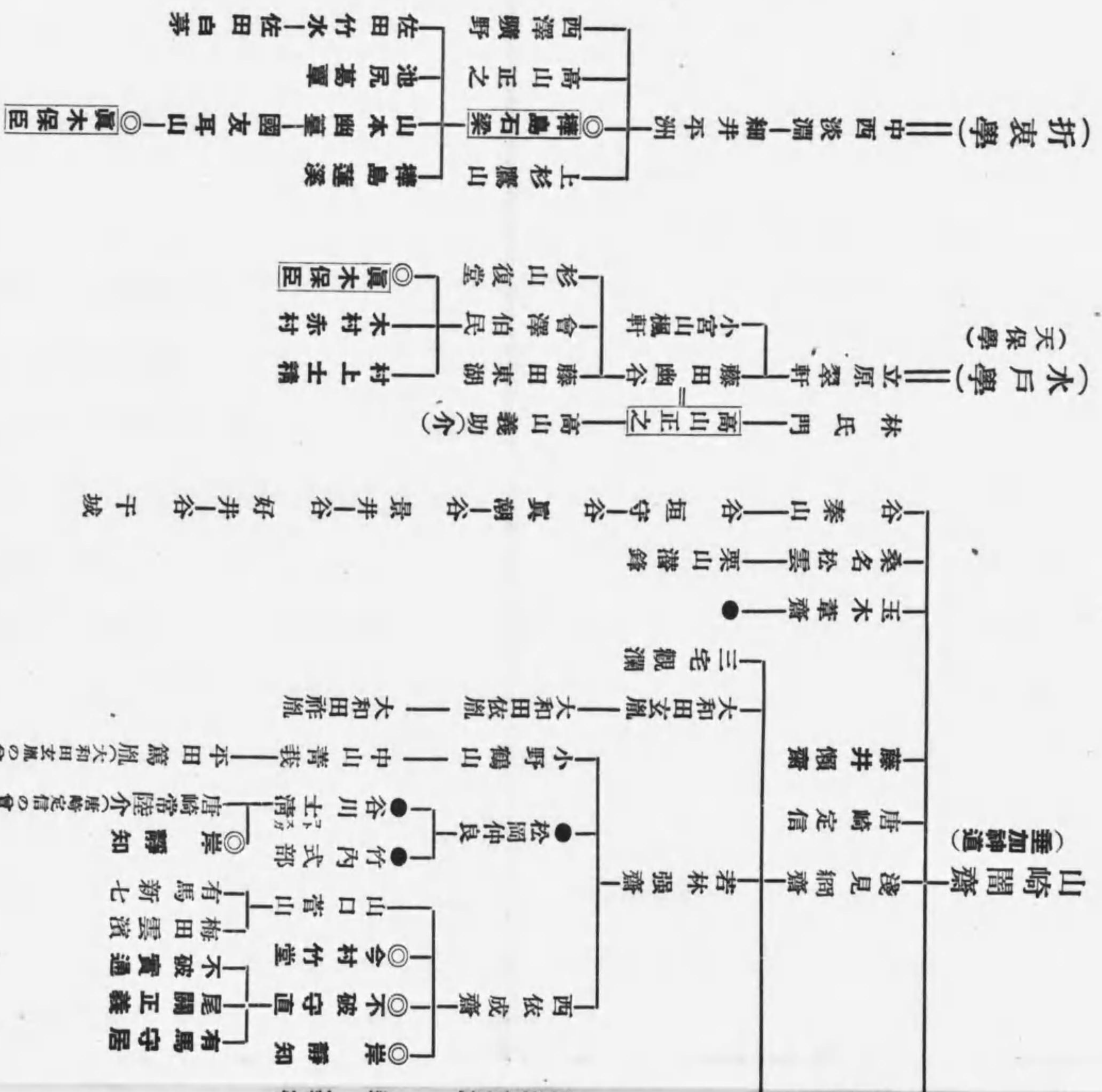
よちてもみてん我何人

正之—眞木保臣—佐田自孝—三烈士鐘時、猪田
(明治初年) (日清役)

(日韓併合)
武田範之(二進會) — 小徐武雄……

冊255
672

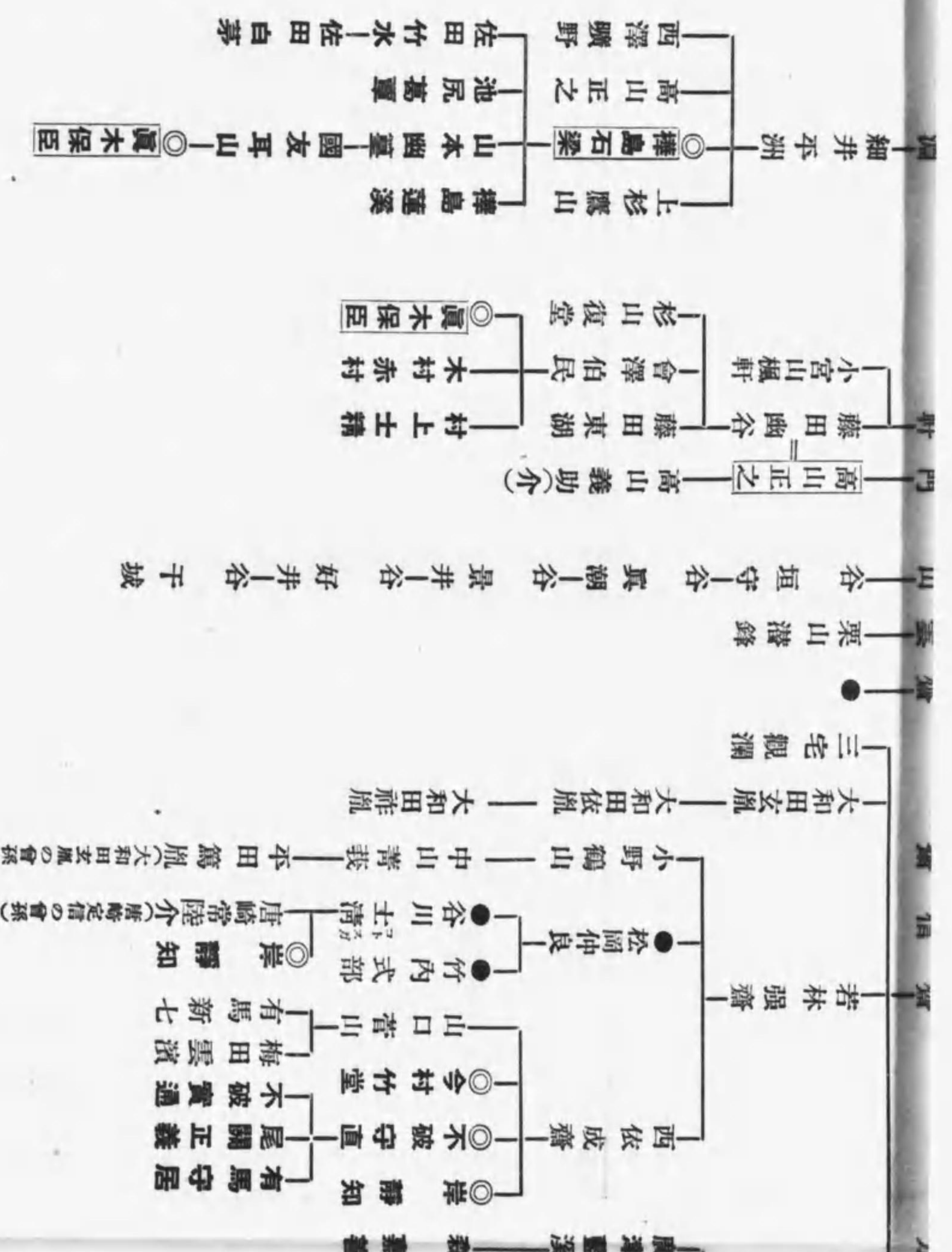
統傳思想 著者寄贈本 久留米藩勤王恩



水戸學の神髓
一、學問に流派なし、
二、奉神州之道、春西
崇儒、無有偏黨
高山先生の主義
章句に拘はり實事を研
道は修身齊家專一に候
石梁先生の學風
(文集後篇卷三)
一、夫聖人之道、内之
義不思之、……
要之詭激之說、非
其唾餘者已、是以
二、博く諸書を熟讀し
物態を諳んじ、天
あらん事專要の事
眞木先生の學風
學問といふものにはま
は制度に明に、或は性
つけずなどいふ様の學
ど、やゝもすれば釋法
る也：：凡て學問は己
出てくれば、よく

高山の大人なに

高山正之—眞木保臣—佐田
(日韓併合)
武田純之—眞木保臣—佐田



高山の大人なに人ぞ人ならば
 よちてもみてん我何人ぞ
 眞木保臣

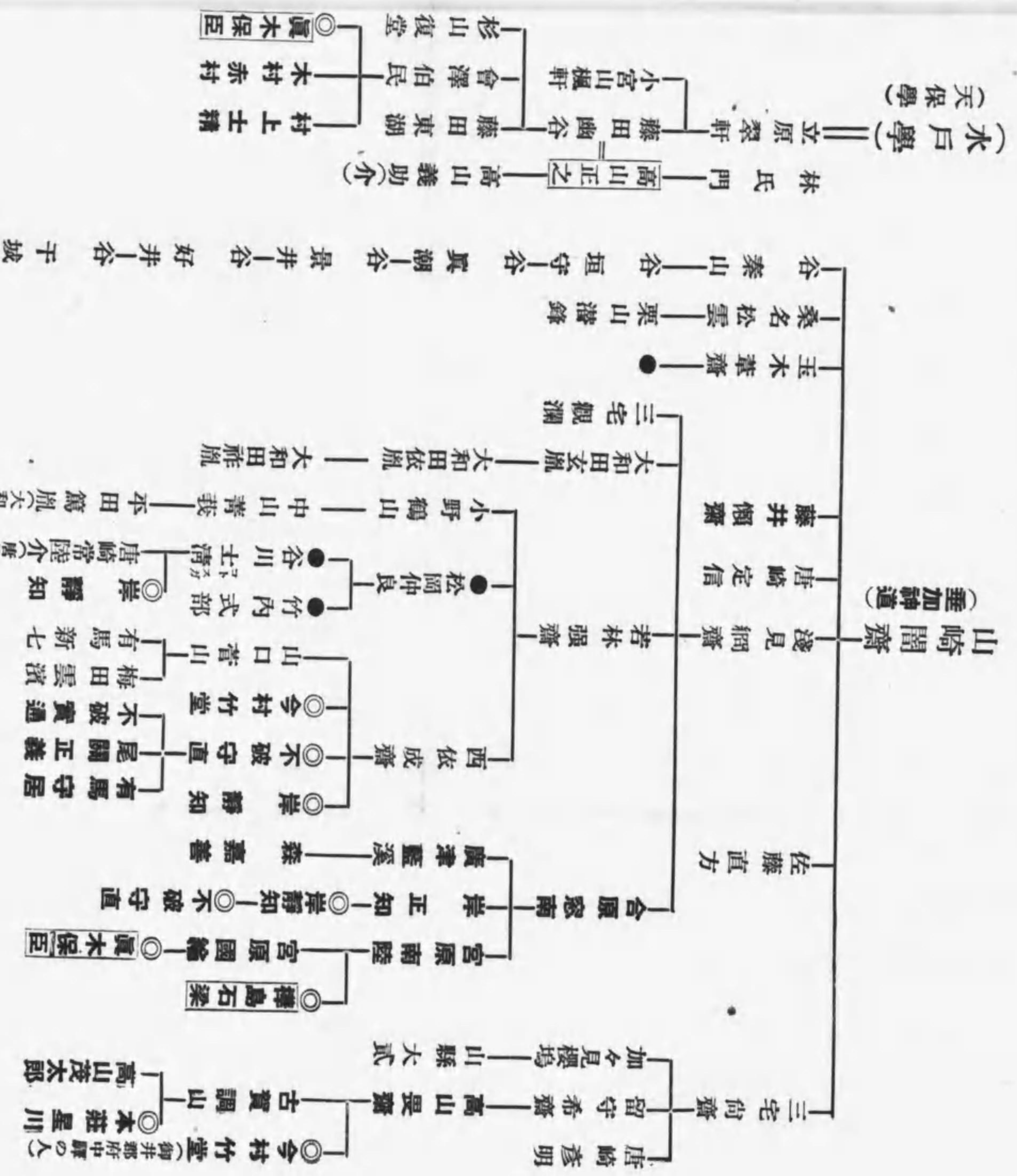
高山正之 — 眞木保臣 — 眞木保臣 — 眞木保臣
 (明治初年) (日清役) (明治三十年頃) (日露役) (日露併合) (日露併合)
 三烈士(健時、猪田、大熊) — 土方清、松隈勝太 — 梶村文夫
 武田龍之(進會) — 小徳武雄

學問といふものにはまた種々あり、記誦の學、詩文の學、其他にも天文地理或は制度に明に、或は性理に精しく只一偏に凝りて日用彝倫君臣の大義には心もつけずなどいふ様の學もあり。就中性理の學などは、聞けば左もあるべき事なれど、やゝもすれば禪法師の口氣に似て其論高きほどいよく日用に益なく覺ゆる也。：：凡て學問は己を修め人を治むるもの也、一偏にかたよれば宋人の弊も出てくれれば、よく論孟など講じて、聖賢の言語云爲を探討すべし(何楊錄)

眞木先生の學風
 學問といふものにはまた種々あり、記誦の學、詩文の學、其他にも天文地理或は制度に明に、或は性理に精しく只一偏に凝りて日用彝倫君臣の大義には心もつけずなどいふ様の學もあり。就中性理の學などは、聞けば左もあるべき事なれど、やゝもすれば禪法師の口氣に似て其論高きほどいよく日用に益なく覺ゆる也。：：凡て學問は己を修め人を治むるもの也、一偏にかたよれば宋人の弊も出てくれれば、よく論孟など講じて、聖賢の言語云爲を探討すべし(何楊錄)

水戸學の神髓
 一、學問に流派なし、皆孔子を學ぶのみ (立原翠軒)
 二、奉神州之道、資西土之教、忠孝無二、文武不岐、學問事業不殊其効、敬神崇儒、無有偏黨集衆思、宣群力、以報國家無窮之恩 (弘道館記)
高山先生の主義
 章句に拘はり實事を研究せざるは、學文の何たるを知らざるものに候、人倫の大道は修身齊家專一に候、然る上は天下も治め得らるるものに候(正之書簡の一節)
石梁先生の學風
 (文集後篇卷三志論同卷五「與柳子商」文參照)
 一、夫聖人之道、内之修身、外之治國平天下、是已、故士志於道耶、字句末義不思之、：：：夫非思孟、叻于荀子、而盛于物子、雖其言之如可驚乎、要之詭激之說、非道之得、不佞不取也。：：：至後之稱徠學者、則多醉其睡餘者已、是以其談經、率皆首鼠。：：：(與柳子商)
 二、博く諸書を熟讀し一身を修むるは勿論、和漢古今の治亂興亡を考へ、人情物態を讀んじ、天下國家の制度沿革をも講じ置、まさかの時一廉の御奉公あらん事專要の事なるべし (明善堂覺書)

本體寄著者



閻齋先生の學風

一、學問の道は致知力行に在り、而し存
 二、文武は仁義の具なり、文は仁を實行
 三、皇國の神道を明にして日本人として
 水戸學の神髓

高山先生の主義

一、學問に流派なし、皆孔子を學ぶのみ
 二、奉神州之道、資西土之教、忠孝無二、
 崇儒、無有偏黨集衆思、宣群力、
 高山先生の主義

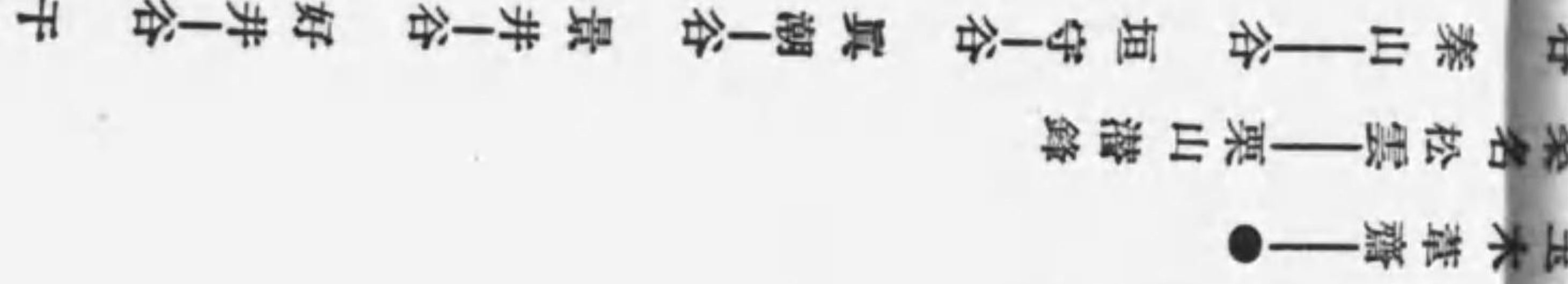
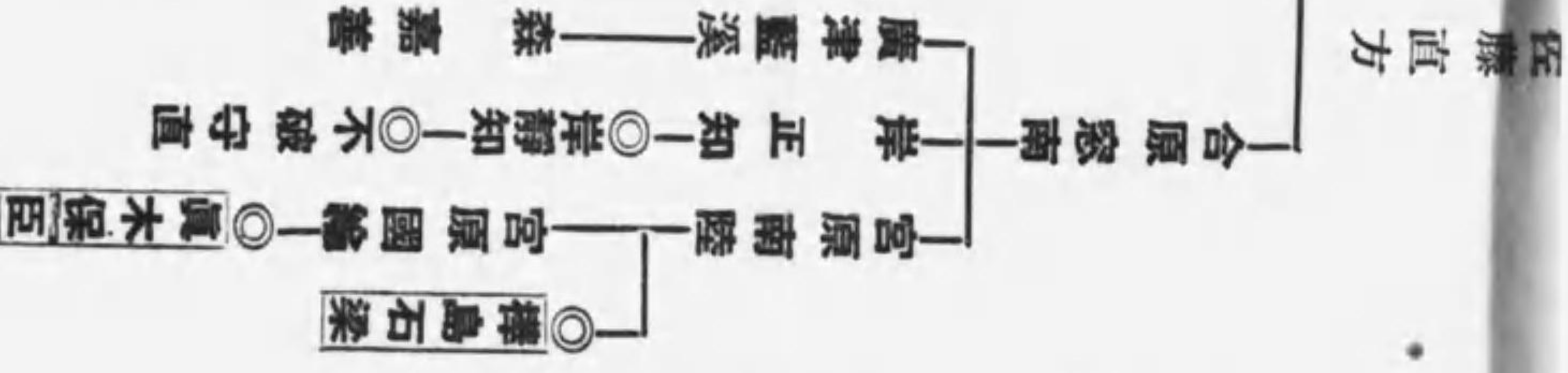
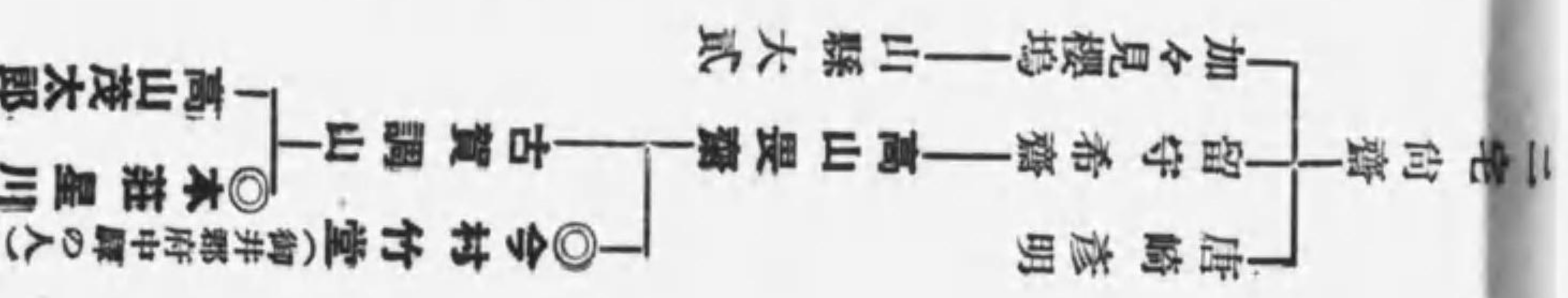
石梁先生の學風

章句に拘はり實事を研究せざるは、學文の
 道は修身齊家專一に候、然る上は天下も
 (文集後篇卷三忠論同卷五與柳子西)

眞木先生の學風

一、夫聖人之道、内之修身、外之治國
 義不思之、……夫非思慮、防于指
 要之詭激之說、非道之得、不佞不取
 其唾餘者已、是以其談經、率皆冒冒
 二、博く諸書を熟讀し一身を修むるは勿
 物態を諳んじ、天下國家の制度沿革
 あらゆる事專要の事なるべし (明尊堂

學問といふものにはまた種々あり、記誦
 は制度に明に、或は性理に精しく只一偏
 つけずなどいふ様の學もあり。就中性理の
 ど、やへもすれば禪法師の口氣に似て其
 也……凡て學問は己を修め人を治むる
 出たては、



一郷之善士、斯友二郷之善士、一國之善士、斯友二國之善士、天下之善士、斯友天下之善士、以友天下之善士爲未足、又尚論古之人、頌其詩、讀其書、不知其人、可乎、是以論其世也、是尚友也 (孟子) 石梁先生學塾稱尚友會

關齋先生の學風

- 一、學問の道は致知力行に在り、而し存養 (今の所謂修養) は此二を貫くものなり。
- 二、文武は仁義の具なり、文は仁を實行するの具にして、武は義を實行する具なり。
- 三、皇國の神道を明にして日本人としての自立的精神と國家的思想とを養ふ。

水戸學の神髓

- 一、學問に流派なし、皆孔子を學ぶのみ (立原家軒)
- 二、奉神州之道、資西土之教、忠孝無二、文武不岐、學問事業不殊其効、敬神崇儒、無有偏黨、集衆思、宣群力、以報國家無窮之恩 (弘道館記)

高山先生の主義

章句に拘はり實事を研究せざるは、學文の何たるを知らざるものに候、人倫の大道は修身齊家專一に候、然る上は天下も治め得らるるものに候 (正之書簡の一節)

石梁先生の學風

- 一、夫聖人之道、内之修身、外之治國平天下、是已、故志於道耶、字句未義不思之、……夫非思孟、昉于荀子、而盛于物子、雖其言之如可驚乎、要之詭激之說、非道之得、不佞不取也……至後之稱徠學者、則多醉其唾餘者已、是以其談經、率皆首鼠…… (與柳子商)
- 二、博く諸書を熟讀し一身を修むるは勿論、和漢古今の治亂興亡を考へ、人情物態を諳んじ、天下國家の制度沿革をも講し置、まごかの時一塵の御奉公あらん事專要の事なるべし (明善堂覺書)

眞木先生の學風

學問といふものにはまた種々あり、記誦の學、詩文の學、其他にも天文地理或は制度に明に、或は性理に精しく只一偏に凝りて日用彝倫君臣の大義には心もつけずなどいふ様の學もあり。就中性理の學などは、聞けば左もあるべき事なれど、やへもすれば禪法師の口氣に似て其論高きほどいよく日用に益なく覺ゆる也……凡て學問は己を修め人を治むるもの也、一偏にかたよれば宋人の弊も出で、…… (論語の注、聖賢の言行を以て、聖賢の言行を以て、可畏敬)

同 九年 三十四歳 六月富士山に登る。十一月郷里を發して江戸に赴く。

天明元年 三十五歳 江戸に在りて有志の士と交る。

同 二年 三十六歳 九月江戸より還り、十月また京都に上る、途次木曾山中にて病者を救助し、看護數日に亘り、十一月入洛す。十二月伏原卿等と謀りて、皇政復古の基礎たるべき、皇學復興の第一着手として大學寮再興を企つ。是歳長男義介(助)生る。

同 三年 三十七歳 二月亡祖父に「伊賀鎮靈神」の號を賜はる。三月利根川氾濫上州地方の慘狀甚しきを聞き、急ぎ歸郷して豪家と謀りて窮民を救助す。九月郷里を發し途次武、甲、三、尾の諸國を巡遊す。十月また上洛、祖母の八十五歳に「鎮得」の壽號を賜はる。是歳忠孝節義の廢れたるを嘆き「言の葉の塵」を著す。

同 六年 四十歳 八月祖母歿す、八十八歳。叔父劍持

二

長藏と共に祖母の墓側に小屋を構へて、爾後三年の間喪に服す。孝義和漢に其比を見ず。

寛政元年 四十三歳 六月喪慮を出づ。

同 二年 四十四歳 四月國を去り江戸に出づ。先生の勤皇思想益々昂まり、朝野慷慨の志士愈々先生を重んず。六月東國遊歴。七月水戸に抵り、居ること二ヶ月、北行して奥州石ノ巻に到り、後醍醐天皇の御碑を泣拜し、其より津輕を經、海を越えて松前に赴き、出羽を巡歴して仙臺に林子平を訪へり。是歳京都に於て初めて唐崎常陸介と會す。

同 三年 四十五歳 先生京都に在り、専ら同志者と國事を謀る。尊號事件起る。偶々琵琶湖に於て縁毛龜を得て、文治の兆と爲し、公卿の執奏を經て、之を天覽に供す。「玉の御聲」の和歌はこの折の詠なりと傳へらる。この頃より幕府諸藩に命じて、先生の行動を探索監

視せしむること頗る嚴なり。七月下の關より小倉に入り、中津を經て筑前より筑後、久留米に至り唐崎常陸介の紹介により國老有馬主膳を訪ひしも、病中にて面會を得ず、去つて長崎に遊び更に熊本に赴き、十一月中旬筑後上妻郡(今八女郡)に赴き同志の家に往來せり。久留米滞在中は有馬主膳の別墅即似庵に於て志士と密に會談せりといふ。

同 四年 四十六歳 二月熊本を出で、鹿兒島に行き留まること百餘日、六月大隅より日向の延岡に至り祖母嶽に登り、豊後を經て七月再び熊本に遊び、其より豊後に入り筑後、筑前地方を巡歴す。

同 五年 四十七歳 正月より筑、豊の間を彷徨して、四月再び久留米に抵り、森嘉善の門を叩き俄に上京を企てしも果さず、六月また久留米に來りて嘉善の家に宿し、同月二十七日伴狂屠腹

して逝く。死に臨み京都の方を禮拜し、身を終るまで皇室尊崇の一念を貫徹したるは、眞に至誠純忠の偉傑と謂ふべきなり。先生の死骸は嘉善の邸内に假埋葬を爲して厚く其菩提を弔ひしが、是歳十月遺族の請に應じ、高山家の宗旨眞言なるを以て、之を同宗祇園寺の末寺久留米市内寺町なる光明山遍照院に葬る。祇園寺の住僧權大僧都一音法印、謚號を撰びて「松陰以白居士」といふ。

(二) 同 歿後年表

寛政六年 歿後二年 三月十一日水戸の藤田一正、先生の憤死を聞き、祭典を擧げて其靈を慰む。四月二十日 先生の叔父、武州麻羅郡豪村なる劍持長藏、墓參の爲久留米に來り、二十六日遍照院にて法會を營む。

三

享和二年 同十年 五月二日肥前長崎の儒醫、西

道俊、先生の墓前に自刃すと傳へらる。

八月有馬主膳(守居)先生の鎮西日記中の豊、肥、日三州の殘編を抄録して「高山正之書拾拔萃」と題し、末尾に追悼の跋文を記す。

同 三年 同十一年 六月遺子高山義助、墓參の爲來米、藩儒樺島石梁の家に留ること一旬、歸るに臨み石梁一詩を餞す。

天保十三年 同五十年 六月廿七日久留米の志士眞木和泉守、木村重任等相謀りて先生の五十年祭を擧ぐ、時に同藩士村上量弘水戸に在り、獨り靈位を設けて祭文を捧ぐ。

安政二年、同六十三年 六月十四日薩人平朝臣伊地知龍右衛門季靖(後の伊地知正治)石燈籠一基を寄進す。

十一月二日 薩藩士川井田市郎左衛門平正尊、志々目獻吉義濟、石の水盥を寄進す。

四

同 五年 同六十六年 十月朔日筑前隱士平野次郎國臣石燈籠一基を寄進し、且つ和歌を獻じて其赤心を披瀝せり。

萬延元年 同六十八年 九月廿八日 薩人源朝臣高橋新八良滿(後の村石)の玉垣を獻す。

慶應三年 同七十五年 十月十四日 幕府政權を奉還し、王政古に復る。

同 四年(明治元年) 同七十六年 三月久留米藩主有馬頼成公、木村、佐田兩人の建議を用ひ、猪田一之進に命じて先生の墓を修理せしむ。

明治二年 同七十七年 二月 久留米藩主、招魂所を高良山下山川村字旗崎なる茶臼山上に營み、先生及び眞木保臣等王事に斃れし米藩士三十餘人の靈を合祀す。十二月官其氣節を追賞して里門に旌表し、子孫に三人扶持を下賜せらる。

同 六年 同八十一年 八月官民力を協せて旗崎なる茶臼山上に先生及び殉難志士の靈を祀り、御

楯靈神社と號す。

同 七年 同八十二年 十月宮中月次御歌會に、「高山正之」を御兼題として仰出さる。

同 八年 同八十三年 九月志士相謀りて、御楯靈神社の參道に「高山仲繩祠堂記」の大牌を建つ文は川田剛の撰なり。

同 九年 同八十四年 六月九日聖上東北御巡幸に際し、先生の功を追懷あらせられ、祭棗料金十五圓を賜ふ。

同 十一年 同八十六年 三月八日朝廷特に先生に正四位を追贈せらる。同年三月十九日郷黨の有志相謀りて高山神社創建の事あるに當り、思召を以て宮内省より金八百圓、各宮家より金二百圓を下賜せらる。

同 十二年 同八十七年 十一月十五日上州新田郡太田村に高山神社を建て、先生の靈を祀る、現今縣社たり。

同 廿五年 同一百年 七月廿日筑後全國の同志者

茶臼山なる御楯靈神社に於て先生の一百年祭を行ひ、汎く追念の詩歌を募り「高山記念詩歌集」を編せり。(此日當時の陰曆六月廿七日に當る)

同 二十六年 同百一年 五月北白川宮能久親王殿下御西下の折、先生の墓を弔し給ふ。

同 三十年 同百五年 久留米地方の有志墓地を擴め、石を疊みて墳墓を高む。

同 三十二年 同百七年 十二月久留米中學明善校職員生徒墳墓修理費として金八十圓を寄附す。

同 三十三年 同百八年 十月廿三日皇太子殿下久留米御駐駕の際、丸尾侍從を差遣して特に先生の墓を弔せしめ給ふ。

同 三十五年 同百十年 十一月小松宮彰仁親王殿下御來米の際特に先生の墓を弔し給ふ。

同 四十二年 同百十七年 五月廿七日久留米人士相謀りて、高山先生慰靈會を組織し、祭典及び

五

墓地の修理擴張、遺物蒐集等の事を經營せり。
十一月久留米市内各學校職員生徒より石の大燈籠一基を寄進す。

同 四十三年 同百十八年 三井郡内各學校職員生徒一同より、石の大火燈一基を寄進す。

同 四十四年 同百十九年 九月三井郡教育會は郡内有志者の贊助を得て、森嘉善の宅址なる先生自刃の地方二間を劃し、玉垣を圍らして之を保存し、傍に「高山彦九郎先生終焉の地」と刻せる碑を建つ。

十月 三瀨、三池、浮羽三郡内學校職員生徒中より、大石火燈各一基、八女郡内各學校よりは石門一基、山門郡内各學校よりは大理石面に東久世伯の揮毫に係る「玉の御聲」の歌を刻せる碑一基を献せり。

同十一月 北村重敬、鹽川佃、譽田豊吉、水野光衛の四教育家醸金して、六方柱形の石の花筒

壹對を墓前に献す。

十一月 陸軍特別大演習舉行の際、山縣、大山、伊東、奥、井上の五元帥、及寺内陸軍大將等參拜墓畔に記念の松を手栽せらる。

大正五年 同百二十四年 十一月十四日特別大演習の際、徳川侍従を墓前に差遣せらる。(記念樹手植)

十二月十日 久留米市協議會の主催にて臨時祭を行ひ舊主家たる有馬頼萬伯參拜せらる。

同 六年 同百一十五年 九月十九日朝香宮鳩彦王殿下先生の墓を弔し記念樹を植ゑさせらる。

同 十年 同百一十九年 久邇宮邦彦王殿下先生の墓を弔ひ記念樹を手栽せらる。

同 十四年 同百二十三年 高野山管長泉智等大僧正參拜、記念の松樹を植う。

昭和三年 同百三十六年 京都三條橋畔に先生の銅像を建設す。十二月 倉田泰藏御即位御大禮

奉祝記念の爲、高山先生自筆の「寛政元年江戸日記」の殘編をコロタイプ版として施本す。

同 五年 同百三十八年 鹿兒島の劍道家今村貞治門弟數人を率ひて參拜、石火燈壹對を寄進す。

同 六年 同百三十九年 群馬縣下の官民有志相謀りて、高山會を設立す。十一月廿六日 群馬縣新田郡田澤野村大字細谷字中なる先生宅址、及び遺髮塚「史蹟」として、文部省より指定せらる。

同 七年 同百四十年 十月廿日賀陽宮恒憲王殿下先生の墓を展じ松樹を手栽せらる。

同 十年 同百四十三年 五月廿七日夜間中學皇道館職員生徒より石火燈一基を墓前に寄進す。

同 十二年 同百四十五年 高山彦九郎先生慰靈會を改組し、久留米市長を會長同市助役を副會長兼實行委員長に、筑後史談會幹部及び市内有志家其他を同委員として強化す。

同 十三年 同百四十六年 一月名古屋の畫家井手蕉雨、高山先生少年時代の「繪詞傳」一卷を描きて皇太子殿下に献納し奉る。

七月 先生五代の孫高山正行、宮川(森)嘉善の墓前に石の花筒壹對を献す。

同 十五年 同百四十八年 二月十一日久留米夜學中學職員生徒一同石火燈一基を墓前に寄進す。

六月廿七日 井手蕉雨の寄贈せる先生の胸像、及び香華堂の竣成除幕式を擧ぐ、此等の建設費は總て有志の寄附に係る。

同 十六年 同百四十九年 六月廿七日市内外多數の篤志家より、巨石の水盤一基香華堂内の金燈籠一對及び火燈壹對を寄進す。

同 十七年 同百五十年 本年先生の百五十年忌祭施行に先ち、墓域の整備美化作業大いに進捗して先生の幽魂を慰め、又皇道精神の發揚を圖れり。

六月廿七日神佛兩式を以て先生の百五十年大祭を厳修し、尙ほ市内各種教化團體の協力により當日を中心として其前後に、記念講演會、同展覽會、追慕文章繪畫の懸賞募集、武道奉納緣故地巡拜競走、愛國和歌獻詠會等を催せり。
七月廿一日遍照院内の先生の墳墓、文部省より「史蹟」に指定せらる。同日高山先生慰靈會より杉山忠亮著作、眞木保臣贊評の「高山彦九郎正之傳」一千部上梓施本。
同十八年同百五十一年三月八日大藪守治の喜捨金を以て高山先生慰靈會より先生の「寛政四年日豊肥旅中日記」の殘編一千部を出版施本す。

はしがき

本名録は昭和十八年四月廿三日、大政翼賛會久留米支部主催の勤皇烈士慰靈祭施行の時作成したのを、同年七月廿一日、眞木保臣先生八十回忌に當り、先生を首め同藩戀國忠士の追悼慰靈祭を營む際、更に増補を加へた物である。泉州翁は夙に大補公の純忠を崇尙し、又高山仲繩子の氣魄に私淑して嘗て

高山の大人何人ぞ人ならばよぢても見てん我何人ぞ

と歎慕の懷を述べ、天保十三年六月廿七日、水戸學派の同士と與に其五十年忌祭を擧げられてゐる。

斯くて嘉永・安政以降内憂外患荐に臻り、尊皇攘夷の論勃興するに及び至誠一貫王事に盡瘁して、遂に天王山上に忠魂を埋められたのである。

高山子は寛政五年六月森家に寓居中、筑後の靈峯高良山を仰いで、其十景に撰まれたる「不瀟山（高良山の異名）時雨」と「養尾山暮雪」との二勝を詠ぜられたが、是は實に高山子の和歌の絶筆である。

此の高山子憶れの高良山麓なる旗崎招魂所には、明治六年八月一社殿を建て、御楯靈神社と號し、高山・眞木兩先生の靈を合祀してゐる。

本書を手にされた人は、筑後史談會編纂の「増補西海忠士小傳」及「米藩志士書簡集」を繕いて、郷土先賢の偉勳を偲び、其遺烈を仰ぎて發憤興起、我が國体の精華たる忠孝の美德を繼承して勇往邁進、暴戻不遜なる米英に膺懲の鐵槌を加へて、皇室を泰山の安に置き、以て八紘爲宇の天業を翼賛し奉られんことを祈る次第である。

本表中遺族後繼者の住所氏名不明のもの、或は其他に誤謬あることを發見せられた讀者は直に之を訂補して編者に指教を與へられるやう切望する。

昭和十八年十二月八日（大詔奉戴二周年記念日）

眞木先生及米藩同志者慰靈祭所祭忠士名錄

階位	姓名	通別	雅號	死年	死狀	墓所	御贈位	靖國神社	遺族	住所	遺稿
位四正贈	眞木保臣	和泉守(和泉)	元治、元、二	自殺	天王山	明治二四	明治二一	同	眞木長時	久留米市京町	紫灘遺稿(版) 眞木和泉守遺文 (版)
位四正贈	池尻始	葛茂左衛門	一治、一、一	病歿	宇國限分山町	明治三五		兵庫縣武庫郡寶塚南口	池尻トキ	戸田ミノル	神武氣歌稿 倍七哀歌 自獄中密奉三條公文、日記類數種
位四從贈	大鳥居理兵衛	平信啓	文久、二、九	轡中	水田寺村	明治三五	明治二一	八女郡水田村水田無番	大鳥居ハツ	久留米市梅滿町一二〇	
位四從贈	原道太	盾雄	七治、一、九	自殺	上善寺	明治三一	明治二一	八女郡水田村	原堅太	三井郡合川村	
位四從贈	眞木菊四郎	弦	慶應、一、四	暗殺	間關赤	明治三五	明治二一	高嶋賢太			

位五正贈	位五正贈	位五正贈	位五正贈	位五正贈	位五正贈	位五正贈
半田門吉	古賀簡二 (井村簡二)	加藤常吉	池尻茂四郎	深野孫兵衛	松浦八郎	淵上郁太郎
成久	磐叔	任重	懸嶋	成久	寛敏	丹次
七治、元、九	文久、二、八	天治、一、元	天治、元、一	文久、三、七	元治、元、一	慶應、一、三、八
戰死	病歿	自殺	自殺	暗殺	自殺	暗殺
天王山	大阪瑞光	天王山	天王山	山崎	山崎	水田川村
明治三五	明治三五	明治三五	明治三五	明治三五	明治三五	明治四四
明治二一	明治二一	明治二一	明治二一	明治二一	明治二一	明治二一
久留米市通町八丁目	八女郡水田村	古賀政人	池尻始ニ同ジ		東京都澁谷區幡ヶ谷本町一ノ七一	朝鮮京城府黃金町七ノ一
大和日記(版)		加藤常吉自集			北遊日記	

位五從贈	位五從贈	位五從贈	位五從贈	位五從贈	位五從贈	位五從贈
姉川行道	淵上謙三	池尻嶽五郎	河原忠藏	北有馬太郎 (中村貞太郎)	水田謙次 (謙治)	中垣健太郎
榮藏	西牟田十郎 芳木春太郎	祐利	資三多郎	誠所	蘇貞恒	幸雄
八明治三三、 六七	一慶一、二、 二六	水戸獄舎	元治元、三 一〇、二三	京都本國寺	元治元、七 九、三	元治元、六 二、四
病歿寺廻照院	自殺 町執行峯	斬殺 旗崎	病歿 本國寺	病歿 京都市	戰死 東京市外	斬殺 旗崎
一、一、一五	一、一、一五 一、一、一五	一、一、一五	一、一、一五	一、一、一五	一、一、一五	一、一、一五
方三瀨郡三瀨村蒲池龍雄	淵上郁太郎ニ同シ	池尻始ニ同ジ	久留米市大石町 水田新三郎	東京都橋區下落合二ノ八五五 安井小太郎遺族		久留米市津福本町 中垣コノ
				日記 誠所集		

位五從贈	位五從贈	位五從贈	位五從贈	位五正贈	位五正贈	位五正贈
荒卷羊三郎	酒井傳次郎	江頭種八	鶴田陶司 (續米陶司)	佐田白芽	佐々金平	小川佐吉 (宮田半四郎)
眞刀	重威	國足	(孝德)良	素一郎	眞武	師人
京二、治一、六	京二、治一、六	京二、治一、六	京二、治一、六	一、明治四〇、 四〇	四、明治二、 一七	三、明治元、 三田尻病院一、 三死傷
斬殺 二四旗	斬殺 二七旗	斬殺 二五旗	斬殺 二五旗	病歿 七六總區 東京淺草 泉寺	戰死 二五旗 江刺港 法華寺 招魂所	旗崎
一、一、一五	一、一、一五	一、一、一五	一、一、一五	一、大正五、 一、一、一五	一、明治三五、 八五	一、明治三五、 八五
久留米市本町三八六 荒卷カチ	酒井岩次郎	江頭廣	八女郡羽犬塚町赤坂 鶴田邦太郎	山梨縣東八代郡富士見 村河内一〇七 佐田佐	久留米市櫛原町六七 佐々眞利	久留米市松ヶ枝町 小川巖
				征韓論舊夢談(版) 樺太評論(全) 國体一覽(全) 有馬氏近世私史(全)		

大島居菅吉	山田武雄	樋口胖四郎	西原湊	岡田三	下川根三郎	大島居次郎
伯信	剛辰三	新忠	種朝	忠綱	忠篤	信謹
明治七、二	明治一、四、三	明治一〇、九、二	明治一、二、八	明治九、五、六	明治二、五、二	明治三、九、六
病歿二八	病歿五三	病歿四八	病歿八六	病歿六九	病歿五〇	病歿五四
	青東山京	井上村		野中寺町		
大島居理兵衛ニ同シ	神奈川縣三浦郡浦町 駒幸乙第三號官舎 山田照興	三井郡立石村字井上	朝鮮釜山府左耳面柳斗 西原慶太郎	東京都世田谷区松原町 一ノ五六本庄方 園田八重子	八女郡水田村二〇二	京都市役所電氣課 大島居信光
	己亥日記				幽囚日記	哀慕錄(版)

角大島照三郎	吉田博文	水野正名	稻次正調	木村重任	眞木直人	柴山文平
櫻照	式丹	溪丹	鳴因	松赤三	外益	屏典富
巷雄	衛波	齋後	谷幡	陵村郎	記夫	山典
明治八、六、二	明治一、五、七	明治一、五、九	嘉永一、二、三 中	明治二、一、七、〇	明治五、三、四、三	明治一〇、一、七、一
病歿三七	病歿四七	病歿五〇	病歿二五	病歿六八	病歿八〇	病歿六三
	法西大 界寺町満	正野中 源寺山町	旗崎	野中 山町		
			明治一、五、四			
八女郡水田村水田	神戶市林田區吉田町二 ノ五二二 吉田耕	神戶市林田區名倉町四 ノ七 水野亮	久留米市篠山町三三〇	筑前若松市大字小石五 三四 木村誠	熊本市本莊町川尻口 眞木才次郎	保健大記挿註 今華族類別譜(版)
角大島克巳				種文稿、日記類拾數	日忠天 勇王山 知隊義 日舉日 錄記	

眞木佐忠	山本實	木原貞亮	吉武信義	莊山敏功	井上善三郎	早川盾彦
主馬			山口嘉兵衛 吉武助左衛門	貫舍平人	幡嶋彈正	
明治三四、五、三	明治三六、九、二六	明治三六、一	明治三九、二、二六	明治四〇、一四	明治四〇、一、二七	明治四一、一、二八
病歿六七	病歿七一	病歿七〇	病歿八三	病歿六八	病歿七〇	病歿七三
久留米市京町 眞木長時	久留米市庄島町一〇 山本城夫	八女郡福島町三一七 木原クニ	福岡市東職人町三六 吉武ナミ	八女郡水田村大字水田 莊山保夫	久留米市庄嶋町 井上敏夫	三井郡小郡村字小郡二 早川筑之助
	ひとやの記 (版) 西海忠士小傳 (全)		薩摩行日記	莊山敏功談話筆記		

佐田剛之助	宮崎土太郎 (鶴太郎)	内藤新吾
深山鹿之助		敏樹
明治四五、三	大正二、二、二七	大正六、八、二
病歿六六	病歿七三	病歿七七
朝鮮釜山府實水町一ノ 一〇四 佐田正芳	東京都荒川區於久町六 ノ一三四 宮崎滿吉遺族	福岡市住吉鏡嶋天神森 内藤重樹
王政復古の概略談 (版)		翠楠舎日記 獄中上書草案 詩文稿

(昭和十八年十一月末調査)

皇紀二千六百年紀元節 【印施】

七十六叟 黒岩玄堂

南福五六一 田中印刷

448
21

終

